慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代日本語の略語法に関する研究 : 外来語由来の造語成分を中心に
Sub Title	
Author	孫, 佳瑞
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2022
Jtitle	日本語と日本語教育 No.50 (2022. 3) ,p.115- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	刊行50周年 大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20220300-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』50：115（2022.3）

〔大学院文学研究科修士論文〕

現代日本語の略語法に関する研究
――外来語由来の造語成分を中心に――

孫　佳瑞

本論文は、日本語で頻繁に使用されている外来語略語に注目し、略語の構成要素が次に新語を造る要素となる変化の過程を考察した。そして、それらの造語力には差があることを明らかにし、さらには略語になったために本来は別語であった外来語が見かけ上同じに見える要素があることにも注目した。こうした略語の理解は外国人学習者にとっても日本語理解に有効であると考えた。

論文の構成とともに概要を以下に記す。

第 1～3 章では研究の背景、目的、方法について述べた。第 4 章では、造語法及び省略の位置づけの選考研究（『日本語学大辞典』（2019）の定義、木村（2019）、山下（2006）など）を検討し、造語法及び省略の定義、外来語の省略の方法を確認した。第 5 章では、『新選国語辞典 第 9 版』（2011）を基礎資料とし、インターネット上から、「Wikipedia カタカナ略語一覧」（http://dictionary.sensagent.com　最終閲覧日 2021 年 1 月 27 日）を補充資料とした。これらの資料から、外来語の略語例を抽出した。その中で、たとえば「パソコン」のようにいったん略語となったものの、「コン」の部分が「ポケコン」「ファミコン」のように造語力を持ち、新たな省略語基となる語例を採取した。そして、それぞれに造語力の差があることがわかった。また、第 6 章では、略語から抽出した造語成分の 3 つの特徴を指摘した。1 つ目は、異なる原語に由来するために、同形異義となった「コン」（「コンピューター」「コンプレックス」「コンテスト」など）が、語源にもどらないと学習者にとって理解しにくい部分があることを述べた。2 つ目は、略語の要素でも造語力の差があることに注目し、比較的に造語力の強い「ハラ」（「ハラスメント」から）などがあることを分析した。これらの造語力が高い理由として、社会に浸透した「セクハラ」などの略語から連想して、「パワハラ」「モラハラ」など、「〇〇ハラ」という形に当てはめた造語をするようになること、インターネット上での多用によって認識が深まったことなどが考えられる。3 つ目は、略語は意味の単位である形態素を重視して作られるというよりも、音節数を重視して 3～4 音節にまとめようとする傾向が強いことを指摘した。たとえば、「アニオタ」は「アニメ|オタク」、「アニソン」は「アニメ|ソング」が省略されているが、「アニ」「オタ」「ソン」はどれも形態素としては不完全だが、略語全体の音節が重視されていると言える。

以上のように、本論文ではいったん外来語が略語となって日本語で定着した後、その略語から新しい語構成要素が見出され、新語を造る要素へと変化する過程について考察した。